

日本の新左翼学生運動の転換点

パトリシア・スタインホフ

プロフィール
1941年米国ミシガン州生まれ。ハーバード大学にて博士号を取得。現在ハワイ大学社会学部教授。日本の左翼運動を中心に、日本社会や社会運動を研究する。著書に「死へのイデオロギー——日本赤軍派（岩波書店、木村由美子訳）など。また、「宿命——」と号し「亡命者たちの秘密工作」（高沢監訳著、新潮社）を英訳し、ハワイ大学出版局より出版。

六十年代後半、世界各国で類似の新左翼運動が展開された。日本での運動の成り行きを知るため、私は主に参加者による論文、本、インタビューなどの回想と事件現場の報告書を使うことにしているが、当時の新左翼学生の回想録を読むなかで、10・8（じゅっばち）が日本の新左翼学生運動にとって大きな転換点となったことを知った。その日のデモは激しく、最初の犠牲者が出たため、学生達が運動をやめるきっかけにもなりえた。しかし逆に、そのデモ以降、彼らの多くが運動にのめり込むこととなった。日本では一九六五年以降、時折デモがおこなわれていたが、一九六七年一〇月八日の事件は特別だった。事件の経過はマスコミの報道よりも学生組織の機関紙に詳しい。その日、佐藤首相のベトナムへの外遊を妨害するため、学生達は羽田空港に集まった。長い棒（ゲバ棒）に労働者ヘルメットの出で立ちで内ゲバをするのは、それまでは新左翼系の学生組織内の争いに限られたことであつたが、10・8で初めて機動隊にたいしてもゲバ棒とヘルメットが使用された。機動隊は羽田に続く橋や高速道路の入り口で機動隊と衝突した。装甲車の上で組織の旗をひるがえすなどの象徴的な行動をとる者もいた。

川の上では、大勢の人々が闘争を眺めていた。それまでのデモと同様、学生は機動隊に石も投げつけた。機動隊員は事前に準備した大きなネットを高く掲げ、自らの安全を確保したが、投石が激しくなると橋の反対側へと撤退した。現場の学生も、テレビで闘争を見ていた学生も、機動隊の逃走を見て「デモ隊が機動隊に勝っている！」と感じた。「権力は絶対ではなくて、力をもって打ち倒す事ができる」と直感した。

機動隊が逃げたため、ある学生が橋の真ん中に停められた装甲車に乗り、空港の方へと走らせた。装甲車の周りを走ったり、橋の上で放水車と戦ったりする学生もいた。突然、学生の一人が倒れた。機動隊がデモを止め学生達を追い出した。京都大学の学生、山崎博昭氏（やまざき ひろあき）が救急車で病院に運ばれたが、亡くなった。「機動隊が殺した」という噂で憤慨した大勢の学生達は、弁天橋へ戻って追悼デモをしようとしたが、彼らは川の上で見守る人々の目の前で、機動隊の催涙弾と放水をあびて橋から追い返された。

学生の回想録には、「山崎さんが死んだので、自分はその代わりに運動しなければならぬ」という彼らの10・8にたいしての気持ちが残されていた。

月刊
みんぱく

12月号日次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
10・8——日本の新左翼学生運動の転換点
パトリシア・スタインホフ</p> <p>2 東大闘争と人類学と民博
清水 昭俊</p> <p>4 大阪万国博覧会とハンパク運動
山路 勝彦</p> <p>6 半世紀後からみた全共闘・探検部
小林 茂</p> <p>7 直接民主主義の実験と大学創造運動
荒川 章二</p> <p>8 学生運動から水俣病闘争へ
平井 京之介</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
いのししのかたち
丹羽 典生</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
メキシコ仮面に見るクリーチャーたち（2）
——テロロアパンの悪魔
アンソニー・シェルトン</p> <p>16 新世紀ミュージアム
沖縄空手会館資料室
相島 葉月</p> <p>18 シネ倶楽部 M
イラン人の人づきあいの機微を知る
——「ママのお客」
藤元 優子</p> <p>20 ながなんちゃ
ハニーホテル
大澤 由実</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|